

障害児教育の新たな芽生え

D-YCAP 理事
横浜市立大学名誉教授
齊藤 毅憲

原発事故で福島から避難してきた子どもへのイジメ問題で、社会的批判を受けてきた横浜市教育委員会は、発達障害のレベルによって通っている個別支援学級などの小学生の中から、特定の分野で突出した能力を持っている児童を選抜して、その能力を伸長、発揮させることを支援する事業を 4 月からスタートしている。対象となる子どもの保護者に協力してもらい、10 月から指導を本格化させたいとのことである。

現状では、障害のある子どもたちが学校生活で感じている問題点を克服する指導や支援に終始しているが、発達障がいや知的障がいのある子どもの中には計算や記憶などの特定の分野で突出した能力を持っており、それらの子どもの支援を行うことを目標にしている。

これは、障がい児教育の新たな芽生えであり、積極的に評価したいと考えている。このような教育のパイオニアは、東京大学先端科学技術研究センターと日本財団による「異才発掘プロジェクト(通称:ROCKET)」である。この中心メンバーが中邑賢龍(なかむら・けんりゅう)教授である。このプロジェクトは 2014 年からスタートしているが、横浜市教育委員会はこのプロジェクトの考え方をヒントにしている。



ROCKET プロジェクトの第 1 期生濱口瑛士『黒板に描けなかった夢—12 歳、学校からはみ出した少年画家の内なる世界』(ブクマン社、2015 年)を見た。3 歳ごろから絵を描きはじめ、言語 IQ は 133 あり、物語を作ることが得意な彼は、学校ではイジメに遭っていたが、その絵と文章は実に見事である。そして、無限の可能性感じさせるものがある。その意味でも、横浜市教育委員会の新たな芽生えに心から期待したいと思っている。